

## 妖怪三題

今夏に美術工芸資料館で開催した「妖怪パラダイス!—現れる異形のモノたち」展は、第4回京都・大学ミュージアム連携スタンプラリーの関連企画であったこともあり、小さな子どもからお年寄りまで多くの方に楽しんでいただくことができた。じつはこの大学、妖怪や鬼など異形のモノを描いた絵巻を数多く所蔵している。そしてその多くが、大学の前身校である京都高等工芸学校の図案科の教材としてごく初期に購入されたものである。

なかでも有名なのは、同展の目玉ともなった「百鬼夜行絵巻」(A) (AN. 3449) であろう。標本台帳によれば、原本は、室町時代に描かれた大徳寺真珠庵蔵の「百鬼夜行絵巻」(重要文化財) であり、当館の作品はその模写とされる。冒頭に「嘉永四年辛亥三月十八日寫」とあり、江戸時代末期の



「百鬼夜行絵巻」(A) 1851年、紙本着彩、1904年購入、AN. 3449

作品である。妖怪画とはいえ、繊細なタッチで描かれた淡い色合いの美しい絵巻である。残念ながら模写した人物は分からない。

百鬼夜行とは、夜が更けると異形のものたちが現れて行列をなし、京の町を跳梁跋扈するといういわば超常現象であり、遭遇すると祟りがあると京の人々に恐れられた。これをモチーフとして絵巻物が描かれるようになるのは、室町時代以降のことである。

「百鬼夜行絵巻」に描かれるのは、鬼やいわゆる付喪神たちである。付喪神とは九十九(つくも)とも書かれるように使い古された道具たちが百年たつて魂を得た姿であり、釜や五徳といった台所用品や琵琶や琴などの楽器、武具や仏具など身の周りの様々な物が、その恐ろしい現象とは裏腹にユニー

クで愛嬌のある妖怪として描かれる。絵巻の通例に反して詞書がない。

現存の「百鬼夜行絵巻」でもっとも古く有名なのは、真珠庵本であるが、じつは多くの模本、そして別系統と思われる異本が存在している。

当館にはじつは「百鬼夜行絵巻」が2点ある。いずれも作者不明であるが、内容としてはいずれも真珠庵本のヴァリエーションである。ただ真珠庵本の冒頭が、矛を担いで疾走する青鬼、大幣で白布の妖怪を追いかける赤鬼であるのに対し、Aは烏天狗、矛をかつぐ蛸入道、龍頭の亀にのった蛙から始まる点、真珠庵本の巻末が、大きな太陽が出現して夜が明け(法師が放った火の玉という説もあり) 妖怪たちが逃げ惑う様であるのに対し、Aではそのあとに闇のなかでうごめく

鬼たちの様子が描かれている点などが相違する。この構成は、真珠庵本系統のなかでも東京国立博物館本Aと呼ばれる作品に近い。全体的に色が淡く、器物の妖怪が大半を占める真珠庵本に比べて、鬼や狐、猿、鳥、蛙といった動物の妖怪が多くみられる。一方、今回展示会に出品しなかった「百鬼夜行絵巻」(B) (AN.3523) は、若干の順序の違い、2匹の妖怪が描き損じられていることを除けば、描かれている妖怪は真珠庵本とほぼ一致する。色味の濃さも近いが、Aに比べると手がおちるようだ。

さて、つぎに紹介したいのが、「異行加茂祭」(AN.3494) である。復古やまと絵の作家、田中訥言(1767-1823) が描いたと伝わるが、定かではない。訥言は、平安時代のやまと絵を復興させた人物として著名であるが、その技法をまなぶた

め、古典的な作品を多く模写したことで知られる。

「異行加茂祭」はその名の示すとおり、上賀茂神社と下鴨神社で春におこなわれる賀茂の祭の行列の様子を主として動物の妖怪に見立てて描いたものである。「文永賀茂祭草子」や「年中行事絵巻」などがベースになっていると考えられるが、「百鬼夜行絵巻」の図様とも関係性が深い。

明治時代初期に編纂された絵画目録ともいえる『考古画譜』には、妙法院の依頼で訥言が「異形賀茂祭図巻」を描いたことが書かれており、この絵巻は現在、出光美術館の所蔵品とされている。当館所蔵の「異行加茂祭」を出光美術館蔵本と比べると、紙継ぎの関係で描かれた妖怪の間隔が多少ずれているものの、抜けている図様もなく、各妖怪のポーズもかなり正確に写されている。ただそのあまりにあっさりとし



「宮中百化図」江戸時代、絹本着彩、1905年購入、AN.3457

た表現から、いずれも訥言のオリジナル作品と断定することには、やや抵抗を感じる。

最後に、同じく田中訥言筆と伝わる当館自慢の一品、「宮中百化図」(AN.3457) を紹介したい。宮中にある貴族の様子を揶揄するように妖怪に見立てて描いた作品で、現段階では、類品がない。『考古画譜』にも掲載されておらず、角川書店『絵巻物総覧』(1995年)にも収録されていない。

当館所蔵の絵巻としては珍しく絹本着彩であり、ところどころに金泥が使われるなど立派な造りである。精緻なタッチで背景描写も含め非常に丁寧に描かれる。本紙に年記はなく、巻末に「應需(\*注文制作の意) 訥言」と記されている。さらにそのしたに、白文方印で「田中之印」、朱文方印で「訥言」とあるが、同じような落款は、これまでの訥言の作品では

見受けられず、現時点で訥言の筆とすることは難しい。

霧のかかった屋敷の様子から画面は始まる。紫色の爬虫類のような老女が、異形の姫にお茶をささげ持って現れる。杉戸の向こうからは巨頭の妖怪が顔を出し、屋敷の主人の前で絵を披露する絵師の手元を傍らの首の長い僧侶が覗き込む。そばには提灯をもった狐の女童。隣では女の幽霊が飛び回り、画中で唯一の人間たちが腰を抜かしている。屋敷のそばの川からは二頭身の妖怪が屋敷のなかを覗き込み、屋敷のなかからは首長女が首をのばして川の水を飲んでいる。その様子を遠くの方からうつろな瞳で見つめる焼けただれた女の妖怪。かつて屋敷にいた女官のなれの果てであろうか。一見華やかにみえる宮中の暮らしが、じつはおぞましい妖怪に憑りつかれた世界であることを物語っているようである。

京都高等工芸学校が開校初期から戦前にかけて購入した模写を中心とする絵巻は、古典的な著名な作品を中心に数多い。しかし、著名な作品にまじってこうした妖怪画のような個性あふれる作品が購入されていたことは、特筆すべき事柄であり、おそらく、当時大津絵や戯画的な日本画に傾倒しつつあった浅井の好みも反映されていると考えられる。実に面白い妖怪三題。できれば、また新たな展示の機会を設けたい。

### ◆参考文献

田中貴子、花田清輝、澁澤龍彦、小松和彦『図説 百鬼夜行絵巻をよむ』河出書房新社、1999年  
『尾張のやまと絵 田中訥言』名古屋城、2006年  
(美術工芸資料館 和田積希)